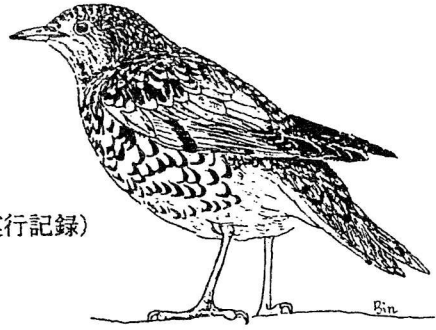


第2回OB小屋作業

(実行記録)



トラツグミ

9月21日(金)

*午後 資材運搬 ボートで出島まで

大島 良治(13期) 椿川 利弘(18期)

9月22日(土)

*午前6時20分 犀川ダム集合

田村 昭夫(3期) 舟田 節子(15期) 岡部 伸一(18期)

椿川 利弘(18期) 山本 英男(37期) 現役26名

*資材運搬班・BH周辺整備

椿川 山本

西田P(6名)

*旧道整備班(800m-ザック置き場)

田村 舟田 岡部

橋本P 岩倉P 阪本P(20名)

9月23日(日)

*旧道整備隊 (ザック置き場一分岐手前鞍部)

*山小屋酒場隊 午前8時小立野キャンパス集合

辰野 隆義 大島 良治 吉田 穂積 吉本 良治(以上13期)

松林 知一(15期) 栃尾 俊治 深田 進 松下 和隆(以上20期)

奥出 俊一 寺島 祥文 西村 かおり(以上33期)

*2時 現役下山

OB隊 水場設置作業

*4時 岡部 山本下山 奥出 寺島下山 梅 典雅(19期)入山

9月24日(月・祭) ホース敷設 畑作り BH周辺整備

*6時 大島 西村下山

*12時 全員下山



現役と一緒に小屋作業をして---

18期 椿川 利弘

小屋作業の打ち合わせの時、仕事上犀川ダムの所長を知っており「まあいいように話をつけておきます」と軽く返事をしたのだが…。管理のいき届かない休日はボートを出せないと言われ、結局一日前から休みをとって、運搬作業を行うはめになった。大島さんも手伝われることになり、20日金曜日の午後、二人でホースなどの資材をトラックで、犀川ダムまで運び、そこからボートでできるだけ吊橋近くまで運ぶ…が計画だった。

しかし、ある程度予想してはいたものの、貯水位があんなに低いとは！その日はダムサイトの長い階段を3往復もしてやっと資材をボートに乗せ、出発。2日前までなら、何とか倉谷川の対岸までは行けたのだそうであるが、その日は、出島の手前の平地へ行くまでが精一杯であった。明日の小屋までの運搬のことを考えたら頭が痛くなった。

帰りに、ダムの事務所でコーヒーを頂いた時、「貯水位の低い秋に運搬しないで、春にしたらいいと、いつも言っているのに」

と、気にしていることを言われた。そのうえ「大雨が降ると貯水位が一日に10mも上がる時がある」とも言われた。荷おろしが終わるあたりから、台風接近に刺激されたのか雨が降り始めていた。この言葉が現実になったなら、資材は来年の夏あたりまでダム湖に水没したままということになる。どうにでもなれ。ついでに、こんな重労働に出ておいでた大島さんのスタイルはネクタイに革靴であった。帰宅後、奥様にどう言い訳されたものか…これも、どうにでもなれ！のうちであった。

21日、小屋に向かう途中、資材が無事であることを確認。現役とOBが小屋に着いての協議の結果、私と山本君（37期）と西田パーティー



モモンガ

の6人、計8人が運搬作業にあたることになった。

資材はホース（直径2m巻、長さ90m、重さ20kg）が2巻、取付金具（重さ20kg以上）、ツルハシ・鍬4本、一輪車1台である。問題はホースをどのように運ぶか？である。

案1）現状のままで運搬することとし、ガレ場が危険であるので、手前で倉谷川に落として、渡渉して対岸から運ぶ。

案2）2巻を8つに切って、巻き直し、一人1本ずつ運ぶ。

案3）2巻を6つに切って、6本を束にして伸ばした状態のまま全員で運ぶ。

現役のみんなと一緒に考えて、1案は危険である、2案はホースが硬くて巻き直せないとなり、3案で実行することにした。それでもホースの長さが30mにもなるために、横に振られたり、片方の手ばかり辛かったり、おまけに腹は減ってくるはで、シンドかった。実際、後ろで「キャー」と言われた時にはヒヤッとした。（落ちたのだが、ホースにつかまる格好で止まってくれた。）

小屋に着いた時には12時半。ここでビール…と思いきや、昨日からのばたばたで忘れてきたことに気づき、ガックリ。それでも気を取り直し、昼食後には、残りの資材の運搬と、テント整備を行い、登山道修復隊の帰りを待った。

その夜は、現役のお客になれるとのことで、岡部君（18期）と私は現役の作ってくれた鳥野菜とうどんを御馳走になり、昔を懐かしんだ。

22日は、岡部君と現役の先頭に立ち登山道整備。下山後は続いて、後で来た酒場隊と一緒に雨の中、ホースの埋設作業を行った（このあたりは、他のOBが書いてくれるらしいから、省略しておく）。苛酷な労働が3日も続いた結果、夜は酒盛りの途中早々に、高野をかいて寝てしまった。

年齢が半分の現役達と一緒に小屋作業をして、ギャップも感じたが、同じ汗をかくことができて、とても嬉しかった。

現役達には、これを機会にもう少し「自分達の高三郎」「自分達の山小屋」という気持ちを持ってほしいと思っている。

9 6 小屋作業を終えて

CL 川本 幸代 (39期)

小屋作業の前日、私は後輩達の質問攻めにあっていた。

「川本さん、本当に行くんですか？」

「台風来ているんですよ。中止ですよ。」

たしかに、ニュースでは次の日は台風接近にともない大雨ということであった。OBとの打ち合わせでは、小雨でもやるということだったが、大雨でもやるのだろうか？あの高三郎に、大雨の中、また登るのだろうか？

高三郎、それは現役にとって、どの山よりも恐ろしい山である。初めてワングルに入って、無理矢理登らされたあの山の辛さは、何年たっても忘れられない。私達3回生は、あの辛さをかわいい1回生には味わせたくないという、今から思えば甘い考えのもと（今年の1回生は強烈！）新トレを医王山にした。これが、高三



ムササビ

郎離れと囁かれる一つのゆえんかもしれない。

しかしながら、今回また、高三郎に歩荷で登ることになった。これを知った上回生は、まだ高三郎を知らない下級生達よりも、顕著に嫌がっていた。そんなこともあって、予想される悪天に、現役は甘い期待を寄せていたのである。

しかし、天というのはいつでも気紛れである。次の日の朝はどんよりとはしているものの、雨は降っておらず、出発できてしまう状態であった。そして、ふと気付けば、もうあのベルクハイムに来ていた。

そこでの話し合いの結果、テントはベルクハイムに張り、そこからサブザックで整備作業に出ることになった。

「何なんだ？台風は来っていないのか？」と不可解気持ちのまま、あの素直に懐かしいとは言いがたい道を登った。登るにつれて、意外にも荷物が軽いせいなのか、おもしろくなってきた。おまけに、草刈りを始めたら、みんな思わぬ力を発揮した。日頃やったことのない草刈りに、夢中になったのである。

はっきり言って、我々現代っ子は、草刈りなんて無縁である。鎌と鉋の区別さえもつかない。そんな我々が草刈りに夢中になるとは、物事はやってみないとわからないものである。目の前に生い茂るジャングルを切り開いた時の喜び。我々は草刈りの意外な一面を発見した。

次の日の天気もまた気紛れで、我々3回生を悩ませた。また登って草刈りをすべきか？待機すべきか？我々の中には、行って少しでも昨日の続きをすべきだという気持ちと、できることなら小屋の側で待機したいという安易な気持ちの両者が入り交じっていた。そんな時、一人の3回生が言った。「行けるんやから行こうよ。」確かにそうだ。せっちゃん（舟田さん）達が行くのに、我々が行かないわけにはいかない。それに、このまま下級生達の期待に応えてはいけない。

そんな訳の分からない上回生意識にとりつかれた我々は、再び高三郎を目指すことにした。だんだんと雨と風が強くなった。しかし、そんな風雨も心地良く感じた。女子は鎌で小さな枝を、男子は鋸や鉋で大きな木々や根っこを切り落とすという見事な連携プレーを見せた。そして、あっという間に、前高三郎と高三郎の鞍部

までやり終えた。

ベルクハイムに戻ったのは午後1時頃であった。我々はOBの方々の好意に甘えて、その日のうちに帰れることになった。

結果的に2泊3日が1泊2日になったわけだが、我々にとってこの2日間はとても中身の濃いものであった。この2日間の中で、我々3回生はあることに気が付いた。それは、我々がいつのまにか抱いていた高三郎に対する愛着と、それを後輩達にも持って欲しいという願いである。当初あんなに嫌がっていた高三郎だったのに、時が流れるにつれて、それは我々がいつでも戻ることのできる故郷のような存在になっていた。

そんなことに気付けたという点で、この山行の持った意味は大きかった。



OB小屋作業あれこれ

15期 舟田 節子

参加者全員の参加日がようやく確定した時には、現役との2回の打ち合わせとはかなり違った様相になってしまっていた。何といっても、OBは仕事優先だし、その仕事は自分の予定だけで決まるはずがない。ただ、そんな事前変更が可能なのも小屋があるおかげであって、 TENT だの炊飯道具だのの采配も加わったらもうお手上げである。つまりは、小屋があるからやる小屋作業だけれど、小屋がなければ到底やれない小屋作業といった一面もあるのだった。

ともあれ、そうやって参加日が確定した時点で…このままでは登山道修復隊と、小屋酒場隊が接触できる時間がない。無理せず楽しく…がやはりOB会活動には大切なことだ。登山道修復の人手が減るのは申し訳ないが…かなり悩んだすえに、「2日目は、OB隊は山中泊を止めて、午後下山。小屋泊まりに変更します」と現役チーフに連絡した。

すると、「みんな喜びます」の返事。エーッ何なのよ？素直っていうのか？人手が減ると心配した私の方が馬鹿みたい…。まあ、私だって姑がいるだけでいじっかしいもの。人手よりは人目がない方が気楽なんだろうな…。

また台風が迫ってくる。我が台風予知能力もたいしたものだ。今度は「台風がきてもやるんですか？」と電話がかかってくる。

いったい…どこがやる小屋作業なの？去年の秋、わざわざ確かめたじゃないか！「部員も、部も万年金欠で是非お願いしたい」という返事だったから、進めた話。また、「それは、前の学年が返事したことで、自分達が言ったことではない」のムードなのかしら？

補助金をもらうからには責任は当然つきまとう。「台風がきたからできませんでした」で、通るのか？「しなかったんだから、もらわなければそれでいい」で済むとも思っているのか？では今回やらないとして、日をあらためてや

る考えはあるのか？

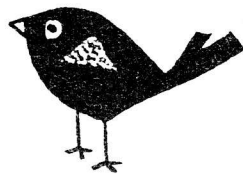
いっぱい不満はわいたが…「できるだけやってみるということで、現地へ行ってみましょう」と返事をする。

わからない訳ではない。登山道修復を主とする小屋作業は平成3年以来、行われていない。

平成5年には屋根修理、6年か床修理、7年か、雨漏り修理と月見の宴。近年の小屋作業は小屋再建に終始していたが、それにした所で、平成3年の前には昭和62年の記録しかなかった点ではまさに画期的だった。その間部誌も発行されておらず、いわゆる登山道整備の小屋作業の伝統の方は見事に消えていた。

だから、今回の企画も、現役は現役の予定で動いてもらい、OBはそれに合わせ、ただ資材運びはお願いするかもしれない…のスタンスをとろうとしていたのが、「どうするんですか」「何がいるんですか」と聞かれるばかり。OBへの遠慮というよりは、何とも見当がつかないらしい。補助金が出るんなら、喜んでやりますとばかり思っていたのが、だんだんOBの方がやりたがっていて指示を出しているかのような、どうボタンをかけ違えているのか？わからない状況になっていく。私は自分の立場でのできる限りの便宜を図ってあげようと思ってはいるけれど、現役に指令を出した覚えはない。（覚えはなくても、OBが言えは指令したことになるのかもしれない）

返事をした後も、これ一体どうなってんの？で、首はかたがったまま…まあ、体験してみなければわからないってのもんだわ…で、辰野さん、岡部さんと最終確認を行う。



9月21日早朝5時半、岡部さんの車でダムに向かう。現役の車も次々に到着…この光景、私達は慣れたが、ほとんどのOBには目が点になる光景だと思う。

台風前の生温かい空気。椿川さんから、「昨日この階段を3往復して資材を運んだ」と聞かされ、ダム横の階段を見下ろしてびっくり。船着き場まで水平移動かと想像していたからだ。それに、彼には4日も今回の作業にかけていただくことになる。あと何もせんでいいと言ってあげたくても、借りてきたツルハシなど、道具の返却までは頼るしかない。負担の分散といったところで…結局各自の思い入れに依存するしかないのが現状だ。

我ヒーロー田村御教祖様は、昨日ザックを預けていかれ、小林さん宅から愛用の(借用)MTBでダムに集合なさるとのことだった。が、財布を手にしたまま走っておいで。昨夜小林さんの帰宅が遅く、起こしては悪いと暗がりて探したMTBが見つからず、結局タクシーで駆けつけられたとのこと。彼一人いれば話題にこと欠かず、あのエネルギーといい、彼こそワンゲル台風である。

ところで、現役は揃ったようだが…なかなか出発しない。ワンゲル規定では台風が30度線を越えたら下山となっているのだそうだ。「そちらで決めればいいから」とは言ったが…

(おヌシら、それで冬山や春山へ行くんか?必死で耐風姿勢をとって、それでも帰ってこなきゃならんのに。だいたい、高三郎も南アも同じ規定かいな。もう一腹立ちついでに、君達の安全基準というの、はっきり言って無難基準だわね。不可欠員なんて、ろくに山にも行ってないのが何人集まってみた所で、安全になりはしない。一人一人がどれだけ山の経験を積み、天候の判断ができ、山行全体やメンバー全体を把握できるか…それが安全でことだわ。悪天だからやめましょう、PWは面倒だから個人山行で気の合う者だけで行きましょう…なんて、安全から遠ざかっているとしか思えないわ。)

「BHで、最新の天気図をとってから」となり、ようやく動きだす。



出島手前に無事資材はあった。ホースはかなりの難物だ。ともあれザックをBHに置いてこなければ運搬も出来ない。

秋の倉谷はススキがおい茂り、どここかもテントサイトのように思えた春に比べれば、よりものの好きの世界になっている。ここで天気図を取り始めたのが3回生の西田君ともう一人で、あとはいかにも暇そう。

(小屋作業ということで、普段とは違っていたのかもしれないが、昔は、そう昔は、1回生の仕事でしたよ。こんな場合は、上回生はどんな状況であればどうするの話し合いをやっていて、2回生やSLはその間パーティー全体を見ていて、次の行動を予想しての指示を与え準備させていたものです。だから天気図が仕上がったと同時に「よし。〇〇」と決定が出て、サッと行動に移ったもんですヨ。

それに…1回生で練習して、実際の天候がどうなっていたかの経験を積んで、リーダーになった頃には的確な判断ができるとされたものでした。ちょっと心配になった光景でした。)

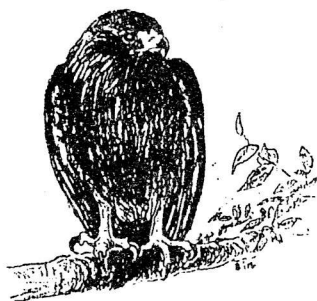
天気図が仕上がり、それから3回生が集まったの協議が始まる。台風の北上スピードが思ったより遅く、さりとて明日からの雨は避けられないであろうし、歩荷で雨の中を下山は危険だし、BHに張って作業をしに行くことに決まる。それから、やおらBHに上がり、やおら荷物を取り出し…OB隊の方はこの間イライラ…。現役も目障りだっただろうけれど、OBはOBで口出ししまいとストレスをためた。ようするに30万円の補助金の責任を感じて、少しでも作業時間をとりたいとあせっているのはOB隊の方

で、現役は、台風来んのかでガッカリムードが漂っていた。

椿川さん、山本さん、西田パーティーが資材運搬にひきかえし、あとの現役と岡部さん、私が旧道へ向かう。田村さんは7週間ぶりの小屋を、まず小屋番としての整頓をしてからおいでるとのことだった。

見覚えのある顔が見えたので聞くと、就職の決まった4回生が4人とも参加しているとのこと。そりゃあ、嬉しい。しかし3回生男子は、風邪やけがで、5名中3名が欠席したのだそう。

(昔、合宿前に手の指を骨折した3回生に対し、リーダー交代ではなく、自覚不足として退部勧告処置をとった学年がありました。新トレ事故後、合宿中止は今後のダメージが大きすぎるとして、期間短縮で夏合宿が実施されることになりましたが、仲間を切っても、気の緩みを排除しようとした辛い措置でした。そんな時代に育った私にすれば、個々の事情があったにせよ、補助金が出るような部の信用のかかった行事に、3回生の野郎の過半数が出てこないなんて、これまた首をかしげるような…。もっとも、「3=過半数」という事態そのものが、仕事をやるうえでは苦しい数字でした。)



イヌワシ

現役の3隊と、後になり先になり、作業をしていく。汗も出てくる。どの枝を処分してやるうか…目が怪しく光り出す。執念で切り倒した木をよいしょと、登山道脇にほうり投げて、やったとばかり、にんまりの顔を見合わせる。朝からの、いやそのもっと前からの不快感がすっ

と消えていくのかわかる。やっぱり、一緒に活動するって大事だ。理屈より何より、一緒に汗を流すのが一番わかりあえる。そう、この積み重ねが大事な仲間を作っていたのだ。あれやこれやと腹をたてていたのがあまりにあっけなく消えて、それが嬉しくもあれば、ここへ出てこない人にはなかなかこんな感覚はつかめないだろうなと思うと、また別の溜息も出てしまう一悶々を抱えっぱなしの私なのであった。

田村さんは予告どおり、仙人の杖ならぬ長鎌をつきながら上がっておいでた。「春には刈っておいたつもりなんだが、随分伸びるもんだなあ」とつぶやかれつつ。彼の言動を下界で見るなら、奇人変人の類と思われてもまあ仕方ないというか…しかし彼の純粹さ、誠実さは山にあって変わらず、ますます光り輝くのだ。決して手を抜かず、苦難とあればますますいきいきと毅然と立ち向かわれる。自分より年上のOBがこうやって登ってきて下さるのが、すごくうれしかった。現役達だって、煙たいばかりでなく、整備作業の現場に出てくるOBがいることを少しは心強く思っているだろう。

休憩中、皆時々ビニール袋を出しておやつを食べている。あとで正善君にきいたら、今では2泊3日なら2泊3日で、山行全体の行動食を分けてしまい、好きな時に食べるようになっていたとのことだった。そんなあたりと予想しつつ、じっと見ていたら「いかがですか？」と言われて赤面。「ううん。私もいっぱい持っているから。ありがとう。」といって、視線をずらし、それでも談笑している現役の人達について視線は戻ってしまう。あの顔、この顔にかつての仲間達の顔が重なる。あの頃だって、あほらしい馬鹿らしいと思いつつ、いい汗をかいて、そんなあほらしい馬鹿らしいことを一緒にやる仲間がいることが、うれしかった。まわりにいるお互いが宝物だ。二度とない青春という言葉は今まさにあなた達のためにある。

雨にもあわず下山。ずっと上がった道ではなく、あちこち作業しながら登った道だから、記

憶にもよく残っている。ああ、こどもやった、あそこもやったで下りて行くのは、自分を誉めたい、いい気分の一時代。手間暇かけた山はもう、よそよそしい山ではない。そしてわか故郷BHにホッと帰りつく。運動隊との再会にひとしきり盛り上がる。

快い疲れの後の、軽口をたたきながらの夕餉の支度。こんな充実度100%の時間が大好きだった。今日の夕食はお客様。春に作ったベンチに腰掛け、OB時間を楽しませてもらう。犀奥に活動を広げた岡部さんと、夏合宿でBH-白山コースをやった山本さんの話も弾んでいるし、ワインの入った田村さんはますます饒舌となられる。考えてみれば、自分のやったことの中ではワンゲルを作ったのが一番価値のあることだった…と酒多飲氏は続けられる。自分は10年学生をやり（親もスゴイ！とても真似はできない）8年ワンゲルにいたことになるが、もしワンゲルがなければ、級友達は卒業していくし、寂しくて金沢にはいらなかったかもしれない。ワンゲルがあったからこそ、次々と仲間ができて、今こうやってあなた方とも話していただけるのだ。やりましょう、OB会を。やりましょう倉谷をユートピアに！

おいしい匂いがたちのぼり、各パーティーに分散して食客となる。私は中華丼班になった。スプーンを口に運びながら、いろいろな思い出が駆け巡る。35周年記念誌編集委員募集の張紙を出しに行ってから、いろんなことがあった。ワンゲル以外であれば通じないようなことに、皆が協力してくれた。3日家をあけることを許してくれる家族にも恵まれた。ここにこうしていただけることの幸せにひたってしまった…。



22日4時、起床ベルが鳴る。こちらでも急いでガスに火をつける。メタやガスの匂い、ろうそくに照らされるまだ十分醒めきらない顔、一日の始まりの一種の緊張漂う一時。予定どおり高三郎の山中のテント泊だったら、どうなっていたものか？小屋泊まりで、随分気楽な支度になった。OB隊の方はご飯のヒートパックに、そのお湯を使ったみそ汁、みりん干しといったあたり。食べ終わった頃にはお彼岸の空も明るくなり、幸いに雨は落ちてこない。

4時起きで、すぐ飛び出すのかと思ったら、また何かぐずぐず、次の指示が出てこない。昨日の連帯感を忘れまたジリジリになる。ようやく、今日はザック置き場から、前高間を作業、下からやるのと上から下りてくると二手に分かれて行くと決まる。それからやおら支度が始まり…で、OB隊は方針を聞いた所で先に出発してしまった。30万円の責任を感じてやるだけやらにゃとあせているのはOBの方で、何とも現役にはロスタイムが多い。

高三郎の連チャンなんて、我ながらようやると思いつつ、山本さんにも「私登りは遅いからお先に」と言ったら、「いえ、僕も遅いですから」の返事。そのうち息苦しそうになって「喘息気味で」と立ち止まる。ちょっと心配だったが、山は続けてきていたんだし、後から現役も上がってくるし…で、現場へ向かうことにした。

さすが日当たりのいい所は伸び放題だ。9時近く、ざわついていた風に雨が混じり始める。山本さんが追いついてきた。「岡部さん達とは何時に集合ですか？」に、「どうせやりながら降りてくるから。出会ったらお昼にするわ」と答えにならない答え。考えてみれば、打ち合わせなければの意識がなかった。山へ来ているというより、手入れに来ているという感覚で、おなかが空けば降りてくるわぐらいだった。打ち合わせなければいけないんだっけ？彼の方は岡部さんと私の間にいればいいらしいと察して上がっていった。

一方不慣れた無線の方は「金沢港まであと一里の所や」とか「スノータイヤが…」とかわか

らんのばかりが入ってきて、そのうちどこかのボタンが押されたのかピーガーピーガーもいい始め（懺悔…3日間をあけるため、家事と仕事に忙殺された私は、無線機のあれこれを使い慣れる時間はありませんでした。それで、3箇所ばかりを急遽主人に習い、あとは触るなど言われてきたのです。だから…それ以外のアクセシントには無力でありました。）うるさくて切ってしまった。後から追いついてきた西田君が、現役はザック置き場で待機しているとのことで、「無線がつかならんし」と迷惑気に言い、また連絡に行かんなんと、降りて行った。私は半分反省、半分さっさと上がってくりゃ無線なんていらんものを…とオバタリアンそのもので開き直っていた。

ともあれ、椿川さん、岡部さんのOB隊がはるかに上がってしまったことがわかり、彼等も意を決して作業を始める。雨も汗も一緒になり、マゾ的世界にひたりながら、藪との戦いを続ける。

10時半、上から降りてきたOBの面々にドッキング。彼等は、妙なねじれ方をして登山道にかぶさっているブナの大枝を落とそうとしている所だった。あっちから切り、こっちから切り、それでもかみあわなくて、ややこしい宙ぶらりんになり…私がヨシと体重をかけたらあっさりボキッと折れてしまった。皆、ヤッタ！と言っていいのかわからない顔をした…優しい人達！残りの枝の蔭で昼食。田村さんは「後は私がやっておくから、もうこれでいい」とさかんにおっしゃる。そうは言っても、周囲に仲間の姿があってこそやれる作業だ。

雨が本格的になる。12時下山を始める。作業は前高を過ぎ、分岐との鞍部からやや上がった所までが終了となった。ずぶ濡れになりながら、皆いい顔をしていた。苦しいだけ、辛いだけ、充実感が残る…人の心のパラドックス。そして苦しみを分かち合い、喜びを倍加できる能力こそが、人類を繁栄させたのだ。この小屋作業は時代に合はんのか？いや、そうではない、やはり人が人である、種としての本能に近い所に、

小屋作業はある。知らないで、食わず嫌いで敬遠しているだけなんだ。やっぱりあおった方がいいのかな？私の頭の中は忙しい。

下りだから身が軽いだけでなく、BHに酒場隊がもう到着しているであろうことが、もっとうきうきさせた。BHへの階段をかけあがる。

「御苦労さん！」の声に迎えられ、ああのもので盛り上がり、もちろん待望のビールもいただいた。

現役達は協議を始めた。下山予定は明日であるが、作業の継続地点に行くまでにタイムアウトになってしまう、ましてずぶ濡れである。即下山が決まり、ただ私達の所へ伝えに来るのに少々時間がかかっていたようだった。「台風様来てちょうだい」といった状況から、よく頑張りと、仕事をこなした。OBの持つスケールで量ってはいけない。彼等は今という時代背景の中では、本当に稀な若者らしさを発揮したのだ。

しかし、やはり「しかし」はつきまとう。来年もこんな現状で、補助金を申請できるのか？ボタンのかけ違い所か、ファスナーか？マジックテープか？といった戸惑いから私は解放されていない。

老田主将に尋ねてみる。「来年は？二年生達やる気ありそうですか？やるんなら、今回の報告の時に、来年も補助金をと陳情しておくけれど…」「やるでしょう。大丈夫ですよ。」とあれば私は信じるしかない。

雨中の撒収でふくれあがったザックを担ぎ、現役達は次々に降りていった。「気をつけて」「失礼します！」BHでは酒場隊が立ち働く第2幕の帳が上がりつつあった…。



第2回山小屋酒場作業報告

山小屋酒場代表おやじ 13期 辰野 隆義

前回春の山小屋酒場では、皆さんの頑張りの御蔭で、予想以上の成果を上げることができました。これに気をよくして、最大の課題である「山小屋に水を引く」を次回の目標に掲げ、測量、ルート決定、材料協議などを現場で行い、下山してきました。

秋の小屋作業が近づき、現役との2回の打ち合わせ、大島君とのプロの判断を加えた協議を行い、いざ実行。

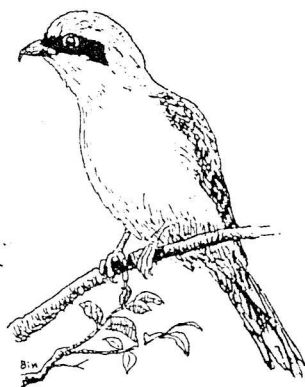
材料の調達、運搬は彼が引き受けてくれ、20日金曜日、椿川君との二人でボートに積み、運べる所までは入れてくれることになった。後で聞くと大変な作業となっらしい。二人に感謝。

22日、日曜日。朝から雨がぱらつく。工学部前に集合したのは13期4人（大島 吉田 吉本 辰野）、15期1人（松林）、20期3人（栃尾 深田 松下。松下君は鎌倉から来てくれたとのこと）の精鋭(?)達。後で33期の3人（奥出 寺島 西村）の県外若手OBが加わる。

ダムで足周りの確認後、雨露をたっぷり含んだダムサイトの道へ突入。大島君の話によると、この秋のダムの水は少なく、資材はあまり奥まで運べなかった。現役隊に余裕があればあるいは、小屋まで運んでもらえているかも…とのこと。荷揚げした場所に資材が残っていないことを祈りつつ、びしょ濡れになりながら進んで行く。荷揚げした場所を探す。う、ラッキー、荷物がない。足跡がいくつも残っている点からして、この雨で水中に没したかもという疑惑も否定できる。やはり、老体を心配して心優しい現役達が運搬してくれたらしい。心から感謝。何しろポリパイプ90m巻（約20kg）2巻き、一輪車1台、パイプ・継手（約20kg）等、老体にはかなりこたえそうな代物だったのです。

山小屋に到着。階段もしっかり残っている。

チゴモズ



小屋の周りにはテントが張っており、小屋の中にもザックがたくさん入っている。どうやら登山道修復隊は、悪天のため小屋に泊まり、作業に出掛けていっているらしい。途中からの運搬がないとわかっていれば、ダムでちょっと無理やなあと外してしまった罐ビールをもっと運んできてやれたのだが…ご苦勞様です。

ともあれ、最初の仕事は、そんな事情で稀少価値の上がった罐ビールを下げて、水場へ。ビールを冷やし、作業前の現場確認。一休みし、昼食をとった所に、登山道修復隊が帰還。雨脚も強くなり、分岐の手前鞍部までで打ち切ってきたとのこと。久し振りで、お元氣な田村先輩を拝顔する。びしょ濡れの現役達を尻目にこれ以上ご歓談ともいかない。というより、OBたるものこんな時こそ毅然と働いていなければならない。丁度頃合もよし。ぞっとするような濡れ合羽を再度身にまとい、外へ出る。

（編者注…辰野様はこの所超午前様続きで、この原稿も相当に出し渋っておいでました。しかし、編集長は、企画・現場監督とたいへんなど無理をいただいていることに恐縮しながらも、頑固に食い下がったのです。

数々の貴重な小屋作業記録が、今は部室から消えてしまい、後世?のためにもどうしても会報の中に現場記録を残しておきたいのです…と。

こんな苛酷な運命は、辰野様がワンゲルに入部した時から決まっていたと…あきらめていただくしかありません。ハイ)

作業開始。取水場所は、小屋から約130m離れた沢の窪みに決定。そこに30cm角のステンレス籠を沈める。しかし、岩盤で籠を沈めることができないため、石を積み水溜まりを作り、ほぼ籠が沈むようにする。その上に大きめの石を積み、多少の雨による増水でも流されないよう固定する。ポリパイプの接続は大島君が担当。さすがプロフェッショナル。ガスコンロでパイプを熱し、接続金具を差し込み、金具についたフランジのボルトを締めつけて接続完了。（編者の同期の誼としての蛇足…この時松林氏はパイプを支え、大島さんとガスコンロの上を傘で覆っておりました。恐らく、ペン以上の重量が持てないのが、新聞社就職の理由であろうと噂されていた氏にも、山小屋酒場には適材適所の仕事が与えられているのでありました。ハイ。）パイプサイズはインチコー（1インチクォーターの略称で32mm径のこと）で、以前のものより1.5倍くらいのものを使い、詰まりにくくした。また、途中で数ヶ所の水抜きバルブを取りつけ、

パイプ内に詰まったものの排出、及び、どこまで通水しているかの確認ができるようにした。昔のホースは露出だったため、秋には巻き取り、春には敷設する手間がかかっていた。その手間の解消として、今回はパイプを浅く地中に埋めることにした。ス stake などの根が張りめぐらされた地面を掘り起こし、パイプを埋めていく。沢沿いは、なるべくパイプが隠れるよう大きめの石を積み上げた。簡単に書くと以上のようなのだが、どの作業も雨の中、泥だらけになりながらで、OB各位、かなりの苦勞をしていただくことになりました。またまた感謝。

皆さんの努力の甲斐あって小屋の前には多量の水を吐き出す水場が完成しました。これで、水汲みの心配もなく、洗い物もスムーズに、快適な小屋生活ができるものと思います。あとは一冬越してみても、問題がなければ万々歳です。

最後に、この作業に携わって下さった方々に心よりの感謝の気持ちを表したいと思います。御苦勞様でした。そしてありがとうございました。

